【公報種別】特許法第１７条の２の規定による補正の掲載
【部門区分】第３部門第５区分
【発行日】平成25年10月31日(2013.10.31)

【公開番号】特開2012-136810(P2012-136810A)
【公開日】平成24年7月19日(2012.7.19)
【年通号数】公開・登録公報2012-028
【出願番号】特願2010-291461(P2010-291461)
【国際特許分類】
Ｄ０１Ｆ　6/84　(2006.01)
Ｄ０１Ｆ　6/62　(2006.01)
Ｄ０３Ｄ　15/00　(2006.01)
Ｃ０８Ｇ　63/199　(2006.01)
【ＦＩ】
Ｄ０１Ｆ　6/84　３０１Ｄ
Ｄ０１Ｆ　6/62　３０３Ｆ
Ｄ０３Ｄ　15/00　Ｂ
Ｄ０３Ｄ　15/00　Ａ
Ｃ０８Ｇ　63/199

【手続補正書】
【提出日】平成25年9月13日(2013.9.13)
【手続補正１】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】請求項１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【請求項１】
ポリエステル樹脂からなり、断面形状が多葉状である繊維であって、該ポリエステル樹脂がジカルボン酸成分とグリコール成分からなる共重合体であって、該ジカルボン酸成分のうち８０モル％以上がテレフタル酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であり、且つ４．０～１２．０モル％がシクロヘキサンジカルボン酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であり、且つ２．０～８．０モル％がアジピン酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であって、該グリコール成分はエチレングリコール成分及び／又はそのエステル形成性誘導体を主成分とすることを特徴とするポリエステル繊維。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００１１】
すなわち、本発明はポリエステル樹脂からなり、断面形状が多葉状である繊維であって、該ポリエステル樹脂がジカルボン酸成分とグリコール成分からなる共重合体であって、該ジカルボン酸成分のうち８０モル％以上がテレフタル酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であり、且つ４．０～１２．０モル％がシクロヘキサンジカルボン酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であり、且つ２．０～８．０モル％がアジピン酸成分及び／又はそのエステル形成性誘導体であって、該グリコール成分はエチレングリコール成分及び／又はそのエステル形成性誘導体を主成分とすることを特徴とするポリエステル繊維であり、好ましくは断面形状において、葉数が３～１０、異形度が０．０５～０．８０の範囲である上記のポリエステル繊維である。

【手続補正３】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００２０
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００２０】
アジピン酸成分についてもシクロヘキサンジカルボン酸成分と同様に、ポリエステル繊維の結晶構造に乱れが生じ、非晶部の配向が低下するため、分散染料の繊維内部への浸透が容易となり、分散染料の常圧可染性を向上させることが可能となる。
【手続補正４】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００４１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００４１】
次に、本発明のポリエステル樹脂は、例えば単軸押出機や二軸押出機を用いて溶融混練する。溶融混練する際の温度は、シクロヘキサンジカルボン酸成分及びアジピン酸成分の共重合量によって異なるが、斑なく安定に溶融混練し且つ安定な製糸性や品位を得るためには、ポリマーの融点から１０～５０℃高い温度範囲で溶融混練するのが好ましく、２０～４０℃高い温度範囲とすることがより好ましい。
更に、混練設備を通過してから紡糸頭に至るまでの間の溶融温度についても、シクロヘキサンジカルボン酸成分及びアジピン酸成分の共重合量によって異なるため一概に特定はできないが、溶融斑なく安定な状態で紡出させ、且つ安定な製糸性や品位を得るためには、ポリマーの融点から３０～６０℃高い温度範囲で溶融押出するのが好ましく、２０～５０℃高い温度範囲とすることがより好ましい。